

「話すこと・聞くこと」の能力を高める指導の工夫

～書く活動と振り返りを通して～



那覇市立泊小学校教諭

阿部 愛香

目 次

I	テーマ設定の理由	67
II	研究目標	67
III	研究仮説	68
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	68
V	研究内容	68
1	「話すこと・聞くこと」について	
(1)	「話すこと・聞くこと」の能力について	
(2)	発達段階における「話す能力・聞く能力」	
2	「話すこと・聞くこと」の能力を高めるための手だて	
(1)	書く活動の効果	
(2)	振り返りによる効果	
VI	授業実践	72
1	単元名	
2	評価基準	
3	指導計画	
VII	結果と考察	76
VIII	研究の成果と課題	80
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献と資料》

「話すこと・聞くこと」の能力を高める指導の工夫

～書く活動と振り返りを通して～

那覇市立泊小学校教諭 阿部愛香

I テーマ設定の理由

人と人との国際的な交流が進む現代、様々な人と相互理解を図りながら関わり合い、共生していく必要性がますます高まっている。人はことばを介して他者とつながっている。これからの時代を生きていく子どもたちにとって、相手や目的、場面に応じて、自分の思いや考えを適切にことばで表現したり、伝えられたことを正しく理解することはきわめて重要である。わかりやすく的確に話すことで正しく相手に伝わり、人と人がよりよい関係を結ぶことにつながる。話したり、聞いたりする能力を高めることは、子ども達にとって、これからの世の中を生きていく上で重要な課題の一つである。

話すことにおいて論理的思考力は不可欠である。論理的に話を組み立てることによって、筋の通ったわかりやすい話となり得る。国際的な学力調査の結果を受け、新学習指導要領において「思考力・判断力・表現力等の育成」が改善の方向性に示された。その基盤づくりとして特に言語力の育成が重視され、「学校生活全体を通して、言語の役割などに関する関心や理解を深め、目的にかなった言語活動ができるようにする」との内容が明記された。自ら思考し判断したことを、言語によって表現する活動が強調されたのである。

『平成 21 年度全国学力・学習状況調査の現状等』（沖縄県義務教育課作成）によると、本県の課題として「文章の構成に係る理解が不十分である」「自分の考えを説明する問いの無回答率が高い」ということが報告されている。それらの能力は、話材を構成し、わかりやすく伝えることと密接に関連しており、「話すこと・聞くこと」の能力を育成することは、本県の児童の課題を解決することにもつながる。

本学級（四年生）の児童を振り返ってみると、4 月当初には、静かに話は聞けるが話すことには消極的で発言する子が限られていた。そのため、児童に安心感を持たせることを意識し、全員に発言する機会を意図的につくったりすることで、話すことへの抵抗感をなくすことに努めてきた。

その結果、皆が少しずつ発言できるようになってきたが、話の内容に関する指導はまだ不十分である。そのため、筋道を立てて話せる児童はごく一部で、発表が苦手な児童においては、うまく自分の思いを話せないといった苦手感を払拭してあげられないままになっている。また、聞くことの指導に関しても、これまで目線や姿勢など態度面の指導が中心で、どのように聞けば相手の話を的確に聞きとって理解できるかという教師自身の指導の視点があいまいだった。

そこで本研究では、話したり聞いたりする過程で書く活動を取り入れ思考を整理させることで、わかりやすい話し方や的確な聞き方を習得させていく。また、自らの話し方や聞き方を振り返り見直すことを通して、発表や聞き取りの質の向上を目指したい。書く活動と振り返りを通して、「話すこと・聞くこと」の能力を高めることができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

書く活動と振り返りの活動を取り入れることにより、相手にわかりやすく話したり、正確に聞いたりする能力を育成する指導方法を研究する。

Ⅲ 研究仮説

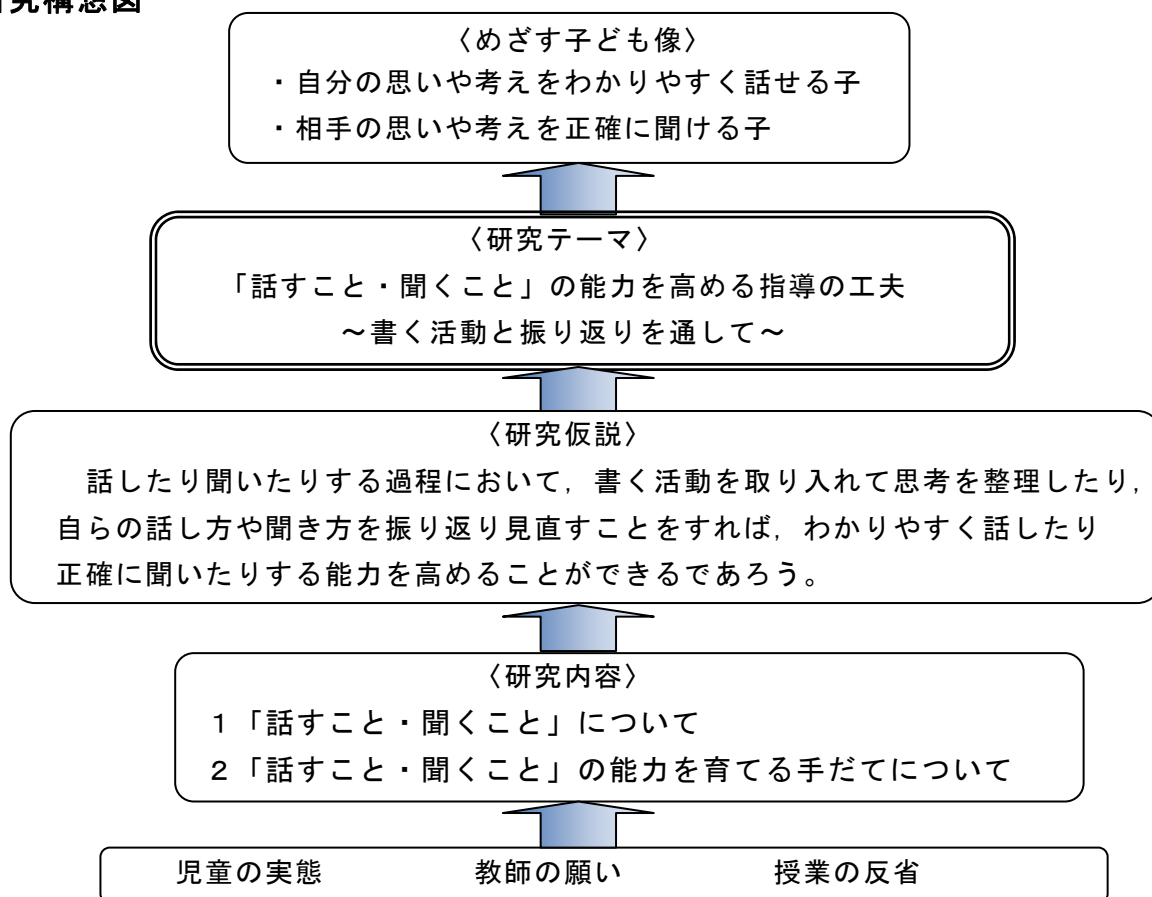
1 基本仮説

話したり聞いたりする過程において、書く活動を取り入れて思考を整理したり、自らの話し方や聞き方を振り返り見直すことをすれば、わかりやすく話したり正確に聞いたりする能力を高めることができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 発表のための構想及び構成の場面で、書くことを取り入れることにより、思考が整理され、筋道を立てて話す能力を高めることができるであろう。
- (2) 学びの過程で、発表の様子を振り返ることのできる場面を設定することにより、話すこと・聞くことについて改善の視点が明確になり、課題に気づき意識を持って学習に取り組むことができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 「話すこと・聞くこと」について

(1) 「話すこと・聞くこと」の能力について

話したり聞いたりする行為を音声による伝達行為と考えたとき、話し手に求められるのは、物事の捉えを的確に聞き手に伝えることである。また聞き手に求められるのは、話し手の意図を正確に捉えることである。

小学校学習指導要領の国語科の目標として「国語を適切に表現し正確に理解する能力を

育成し、伝え合う力を高める」ことが示されている。本研究は、「話すこと・聞くこと」に焦点を当て、話す能力を「適切に表現する能力」、聞く能力を「正確に理解する能力」と定義する。

(2) 発達段階における「話す能力・聞く能力」

話す能力（適切に表現する能力）、聞く能力（正確に理解する能力）とは、具体的にどのようなことができるようになれば良いのか考えていく。学習指導要領における「話すこと」と「聞くこと」の指導事項をそれぞれ二つの系列に大別し以下のように整理した。

話す能力 = 適切に表現する能力

①音声や態度に関する系列

低	姿勢や口形，声の大きさなどに気を付ける
中	相手を見たり，言葉の抑揚等に注意する
高	共通語と方言の違いを理解し，使い分ける

②構成や内容に関する系列

低	事柄の順序などを考えながら話す
中	筋道を立てて話す
高	的確に話す

聞く能力 = 正確に理解する能力

①関心や態度に関する系列

低	興味を持って聞く
中	※ 記載無し
高	

②内容を聞き取る（理解する）系列

低	大事なことを落とさないように聞く
中	話の中心に気をつけて聞く
高	相手の意図をつかみながら聞く

話す能力も聞く能力もそれぞれ大きく二つの系列（①、②）からなり、それぞれが関連し合うことで適切に表現したり、正確に理解することが可能になる。

これまでの指導を振り返ってみると、話すことにおいても、聞くことにおいても指導事項①の系列に重きがおかれ、②の内容に関する指導が不十分であった。国語科改訂の趣旨には、改善の視点として「特に言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力を育成することを重視する」と打ち出されていることから、構成や内容を思考する能力をより重点的に指導していかなければならないと考えた。そこで、「話すこと・聞くこと」の能力の中でも、②の「構成や内容に関する系列」と「内容を聞き取る（理解する）系列」の指導に焦点を絞り、研究を進めることにした。

話の内容に目を向けさせるには、まず目的を明確にし、話材（話すための材料）を十分に準備させ、わかりやすい構成かどうかを検討させる等、思考の過程を踏まえさせることが重要である。構成や内容に関して、中学年では「筋道を立てて話す」ことが求められていることから、自分の考えとその理由、原因と結果、意見と具体例など、話の構成に気をつけて表現させたい。聞くことについては、「話の中心に気をつけて聞く」ことが求められていることから、話し手が何を伝えようとしているのかを明確に捉えられるように、聞きとったことを書かせるなど指導を工夫したい。

2 「話すこと・聞くこと」の能力を高めるための手だて

(1) 書く活動の効果

① 書く活動を取り入れる意図

口で話して耳で聞くことは、すなわち音声言語は、一過性ですぐに消えてしまうという

特質をもっている。そのことがじっくりと内容を考えたり検討したりすることを難しくしている。しかし、話すことや聞くことを「書くこと」と関連付けることで、視覚的に捉えることが可能になる。

話す能力を育むための言語活動例として「スピーチ」があげられる。井上一郎氏(2008)は、説明、紹介、意見等、様々なスピーチ様式における活用能力を具現化するためには、「書いて考える必要がある。書くことによって論理を通し、深く思考を重ねることが可能になる。」と述べている。すなわち、論理的に話す能力を育てるためには書くことによって内面を表出し、整理・検討することが重要だということである。話す前に思考を整理したり、聞いたことを書き留めたりするような、こうした児童の内面を表出させて見直すことが「話すこと・聞くこと」の能力を高めていくことにつながると考える。

② 論理的な文章構成の基本型

市毛勝雄氏(2000)は、言いたいことを筋道がはっきり分かるように話す力を「論理的な表現力」と定義し、その育成については「スピーチの文型指導が有効で、話の組み立ての原理を早くつかませるのが大切である」と述べている。市毛氏の示す文章構成の基本型は次の通りである。

《文章構成について》			総字数		
文章構成	内 容	長 さ	低	中	高
はじめ	これから話すことの紹介・あらましを書く	全体の1/10の長さ	80 字 200 字	300 字 程度	400 字 程度
なか	具体的事例を書く	全体の7/10の長さ			
まとめ	「なか」の共通の性質を書く	全体の1/10の長さ			
むすび	筆者の意見・主張を書く	全体の1/10の長さ			

確かに、説明文や論説文においては、このような文章構成で書かれている例が多い。「話すこと」の指導においても、基本となる型に倣って話のまとまり（構成）を学ぶことで、よりスムーズに習得できると考えた。この文章構成の型は基本形であり、発達段階に応じて「はじめ・なか・まとめ」で締めくくったり、「なか」の具体的事例を複数取り上げることもできる。また、「まとめ」は、具体的事例の共通性を書くのであるが、発達段階を考えて指導が難しい場合や初期段階では、感想を書かせることも考えられる。

スピーチ原稿の字数についても発達段階にふさわしい量を与えるような配慮が必要である。文字数をおおよそ限定することは、言葉への意識が高まる、言いたい事が集約され文が引き締まるという効果も期待できる。

小室恵子氏(2007)は、スピーチの指導において 200 字程度のミニ原稿用紙に書かせるという指導を行っている。その実践の成果として「練習を重ねるごとにミニ原稿用紙は必要としなくなり、自分の伝えたい思いを頭の中で構成して人前で話せるようになってきた」と述べている。話の苦手な児童においては、話したい事を原稿に書くという経験を積み重ねることで、構成の仕方が身に付いていくと考えられる。

③ 聞く指導における書く活動

宗我部義則氏(1999)は「メモの指導は児童生徒の『聞く力』を育てていく上で重要かつ有効な指導である。」と述べ、聞くことにおいても書く活動と関連づけることの重要性

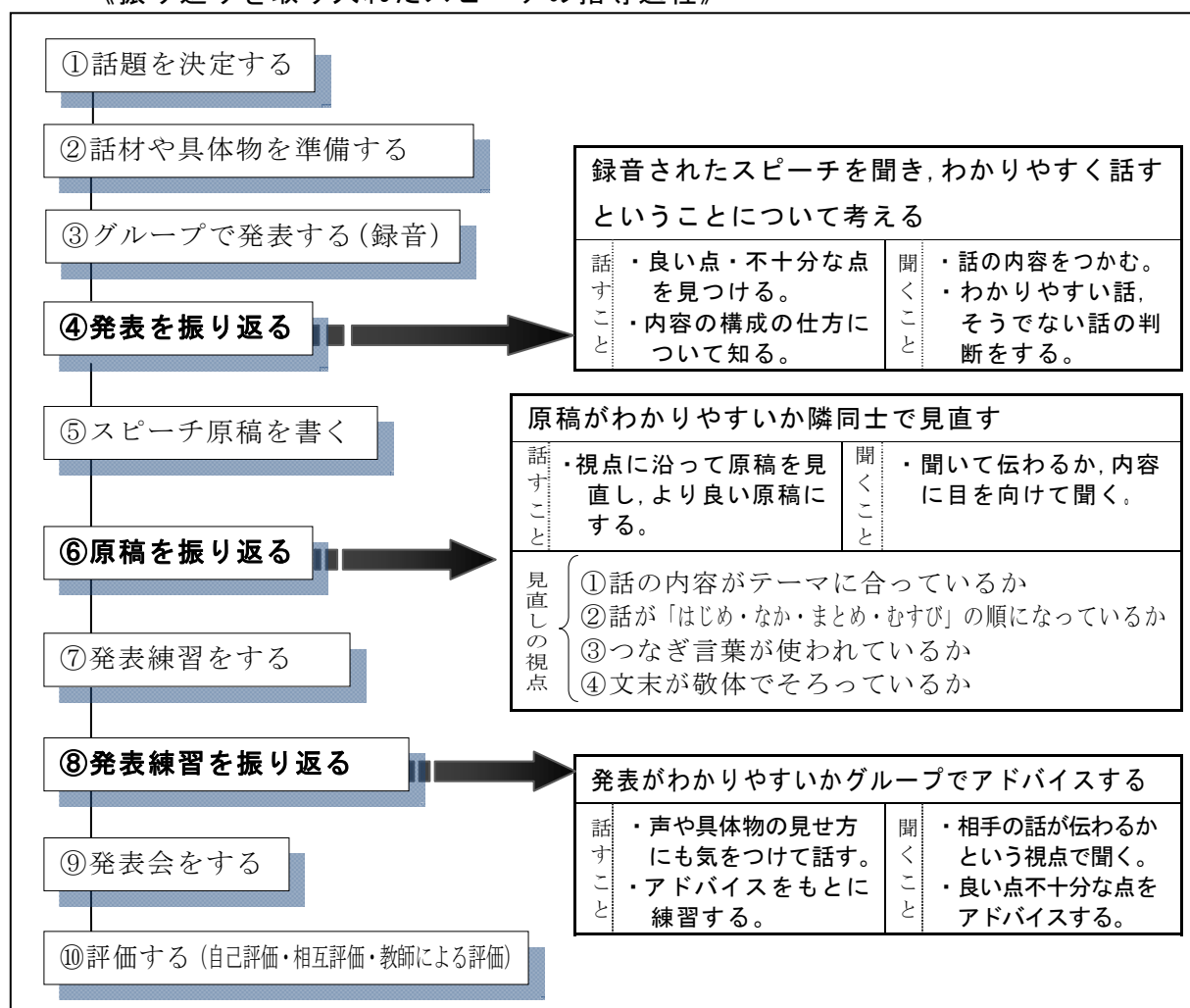
を示している。その際には、全てを書きとめるのではなく、大事な言葉や数字だけを手短かに書きとめるということを指導したい。また、場合によっては、話を聞き終わったあとにその要点を文章で書くということも必要であろう。それらは、聞き方をより能動的なものへと高める上でも重要である。

(2) 振り返りによる効果

なんらかの学習課題を与えた時にさせっぱなしにするのではなく、不十分な点は課題として取り上げて改善していくことが、能力の確実な定着につながる。ましてや、話し言葉が後に残らないという特質上、音声言語の学習指導では、随時評価しながら指導を進めなければ学習目標を達成することは難しい。

植西浩一氏(1999)は、「話をした後でそれを振り返り、再構成し改善することも話す力を高めるために大切である。」と述べている。すなわち、学習過程の中で習得したことを検討・修正させることによって、より豊かで確かなものに高めることができるということである。この考えに基づいて「習得する→振り返る→気づく→生かす」という一連の過程をスピーチの指導に生かせないかと考えた。振り返りの活動を意図的に取り入れたスピーチの指導を以下のように考えた。

《振り返りを取り入れたスピーチの指導過程》



④、⑥、⑧の振り返りの活動を具体的に説明すると、次のようになる。

・「④発表を振り返る」とは

「発表を振り返る」とは、③の段階で発表した発表内容や様子を振り返ることを指す。ここでは、視聴覚機器を活用する。そうすることで、瞬時に消えてしまう音声言語を捉え、効率的に正しく学習を振り返ることを可能にする。

中村毅氏（1996）は、視聴覚機器の活用について「録音録画を再生し振り返ることで、自分の学習を正しく捉え、更に学習をよりよく高めていくための道具とすることができる。」と述べている。発表しているときの自分の姿や話の内容は、なかなか自分自身で捉えにくいものである。再生された映像や音源を実際に見たり聞いたりすることで、発表の姿や内容を客観的に捉え、どこをどう直せばいいのかという改善の視点をつかむことが可能になる。

ここでのねらいは、録音を聞かせることで、話の構成の仕方やより良い話材の選択の必要性等に気付かせることである。それは、わかりやすく話すための話し手の視点でもあり、聞くときにどのような視点で聞けばいいのかという聞き手の視点にもつながる。

・「⑥原稿を振り返る」とは

「原稿を振り返る」とは、自分の書いたスピーチ原稿をもう一度視点に沿って見直すということ指す。これは、⑤のスピーチ原稿を書く段階で理解した構成の立て方を、再度確認することにもなる。

見直しの視点に沿って確認しながら、課題を見つけたら直す。ここでの見直しは、単なる文末表記や言葉の使い方、誤字の訂正だけでなく、「相手に伝える」ことが目的であるということ、「相手に伝わる内容の書き方になっているか」「相手に伝わる根拠であるか」等に目を向けさせることが、ここでの大きなねらいになる。したがって、この原稿の振り返りでは、隣同士または、グループで「スピーチ原稿を聞き合う」という活動を取り入れ、聞いて伝わるか、聞いて違和感はないかということを互いに確認させていく。

・「⑧発表練習を振り返る」とは

「発表練習を振り返る」とは、よく伝わるかどうかを第三者を通して振り返る学習である。村松賢一氏（2003）は、宗我部氏のインタビューの授業の実践を取り上げて、「練習や演習の段階では、まわりで観察し、気がついたことをアドバイスするモニター役を置くことが有効である。」と述べている。すなわち、発表する当人ではなかなか気づかないことを、第三者が感想を述べたり、アドバイスしたりすることで、児童自身が自分の話し方を客観的に振り返り課題に気づくことができる。そこでの気づきを次に生かすことで、より良い話し方へ高めることが可能になる。

VI 授業実践 4年

1 単元名 「便利なものを紹介しよう」

本単元は、教科書教材の「『便利』について考えよう」と「『便利』ということ」の学習の後に行う音声言語の学習活動である。「『便利』について考えよう」は1時間の話し合い学習で、「『便利』ということ」は説明文を読む学習である。それらの学習で、「立場を変えて物事を捉える」という物の見方を培った上で、6時間の本単元のスピーチ学習へとつないでいく。

本学級の児童は、全体的に落ち着いており、話すことよりも聞くことを好む傾向がある。

(事前意識調査 児童 36 名)

	好 き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌 い
話すことが好きですか	3 %	4 1 %	5 0 %	6 %
聞くことが好きですか	4 2 %	4 4 %	8 %	6 %

話すことに苦手意識を感じている児童は、「はずかしい」「何を言うかわからなくなる」等を挙げている。話の内容をどう組み立てればよいのかについての指導が必要である。また、練習の場を確保し、相手から認められるという経験を踏ませることで、話すことへの自信につなげたい。

また、聞くことに関しては、「聞くときに大切なことは何ですか」の問いに対する答えとして「話し手を見る」「しずかに聞く」等の態度面を挙げている児童がほとんどで、「内容に気を付けて聞く」と答えたのは一人だった。どう聞けば相手の話をもっと理解できるかということを考えさせ、話を聞くときには話の中心をつかむということに目を向けさせたい。

このスピーチ学習では、振り返りの活動を計画的に取り入れ、課題を明確にしながら指導を進める。

2 評価基準

関心・意欲・態度	①学習内容に意欲をもち、進んで学習に取り組んでいる。
話すこと・聞くこと	①互いの相違点や共通点を考えながら、進んで話し合っている。 ②自分の考えが相手に伝わるように筋道を立てて話している。 ③話の中心に気を付けて聞いている。
書くこと	①伝えたいことを明確にしながら、文章構成の整った文を書いている。
言語事項	①相手やその場の状況に応じて、丁寧な言葉を使っている。

3 指導計画

大まかな指導過程は、以下の通りである。

指導過程		児 童 の 活 動
(1)	構想	ウェビングでテーマに合った話材を考える
(2)	発表①（1回目）	ウェビングしたものを見て、発表する
(3)	※発表①の振り返り	発表①の録音を聞いて、わかりやすく話すことについて考える
(4)	構成	スピーチ原稿を書く
(5)	※スピーチ原稿の振り返り	見直しの視点をもとに、スピーチ原稿を見直す
(6)	発表練習	各自で発表の練習をする
(7)	※発表練習の振り返り	発表について、グループで感想を交流する
(8)	発表②（2回目）	発表会を行う
(9)	まとめ	発表会や単元全体を振り返る

指導過程を具体的に表すと、次のようになる。 指導計画は6時間である。

過程	時	各過程の概要	評価
構 想	1	【本時の目標】構想を立て、グループで発表し合う。 手立て・様々な角度から思いついたことをイメージさせるためにウェビングの手法で書き留めさせる。 発表のテーマは、「持参した道具の便利さと不便さの両面から話す」ことである。ここでは、発表前の準備段階として児童全員に話材を持たせることがねらいである。 4年生の児童に、各々が持参した道具について「便利さ」と「不便さ」の両面から捉えさせるには、書いて考えさせる必要がある。その際、どこが便利、どんな時に便利、誰にとって便利…というように「便利さ・不便さ」について幅広い視点で考えさせたい。	関①
発表①・一回目		手立て・ウェビングしたものを見ながら発表させる。 ・話す視点を与える。(①声の大きさ・速さ, ②目線, ③内容のわかりやすさ) ウェビングで話材を準備した後、ここでは、敢えて話材の選択や整理等についての具体的な指導を入れずに、グループでの発表へと入る。ここでの発表活動が、次時で発表内容について考えるための布石となるからである。 ここで示した話す視点は、聞き手の聞く視点にもなる。 尚、この発表活動は録音機器で録音し、次時の発表内容の振り返りに活用する。	話② 話③
発表①の振り返り	2	【本時の目標】わかりやすく話すということについて考える。 手立て・前時の「話す視点の③」を取り上げ、録音した発表の音源を聞かせる。 ・説明文での学習を思い起こさせ、話の構成や意見に対する具体的な根拠の必要性に気づかせる。 ここでは、前時の発表の音源をもとに、「わかりやすく話す」ということについて考えさせる。授業では、わかりやすい例とわかりにくさを含む例を児童に聞かせ、気づいたことをメモさせる。「伝えているつもりでも聞き手には伝わらないことがある」ということを経験させた上で、発表内容のどこを改善すればわかりやすくなるのか考えさせる。 ここで話の構成の視点をもたせることで、スピーチ原稿を書くという次時の学習につなげていく。	話① 話③
構 成	3	【本時の目標】スピーチ原稿を書く。 手立て・構成の立て方を示す(はじめ・なか1・なか2・むすび)。 ・わかりやすい話にするための三つの要素を確認する。 スピーチ原稿は、「はじめ」「なか1」「なか2」「むすび」の構成とし、「なか」の部分には便利さ・不便さの両面からの捉えを入れさせる。 説明文の学習で学んだことと関連させ、わかりやすい話にするための三つの要素を確認する。①話の順序に合った内容を書く。②「便利だ」「不便だ」と捉えた根拠を具体的に書く。③つなぎ言葉を使う。	書①

スピーチ原稿の振り返り	4 本時	【本時の目標】スピーチ原稿を見直す。 〔手立て・見直しの視点を与える。〕 前時に書いたスピーチ原稿の振り返りを行う。ポイントに沿って見直せるように、「見直しの視点」を提示する。(①便利と不便の両面から書かれているか、②話の順序に合った内容か「はじめ」「なか」「むすび」、③つなぎ言葉が使われているか、④文末が敬体で書かれているか) この見直しの視点は、前時の「わかりやすい話の三つの要素」と関連する。ここでの振り返りは、自分自身で原稿を見直した後、隣同士の見直し作業となる。まず、スピーチ原稿を読み上げ相手に聞かせて、わかりやすいか確認する。次に、視点に沿って赤ペンを入れてもらう。互いに見直しの作業が済んだら、見やすいように本番用の原稿用紙に清書させる。	関① 書①
発表練習	5	【本時の目標】話し方を工夫し練習する。 〔手立て・「スピーチで気を付けたいこと」について考えさせる。〕 ここでは、発表会に向けての練習を行うが、それに先立って「相手に伝わる発表をするには、どんなことに気を付けてスピーチしたらよいか」を考えさせる。児童の中から、目線、声の大きさ、姿勢、具体物の提示の仕方等があがると予想される。「気を付けること」を決めたら、それを意識して個人で発表の練習を行う。	話② 言①
発表練習の振り返り	5	〔手立て・グループで感想を交流させる。〕 授業の後半は、個人練習したことをグループで振り返る。一人ずつ交代で発表し、「よく伝わるか」という視点で感想を交流する。発表する当人は話すことに精一杯で、自分自身の改善点を見出すことは難しい。聞き手からの感想やアドバイスを聞かせることで、自分自身の課題に気づかせ、さらなる改善へと高めることができる。	関① 話② 話③ 言①
発表②・二回目	6	【本時の目標】発表会を行う。 〔手立て・「スピーチのめあて」を立てさせる。〕 ・聞き手には、話の内容を聞き取ってコメントを書かせる。〕 これまでの学びをもとに、クラス全体で発表会を行う。場作りとしては、教室の四隅に発表の場を設定する。四人グループのそれぞれが、四つの場にわかれて発表会に参加する。 話し手は、前時の練習を生かして、聞き手に伝わるように話すことを確認し、自分の「スピーチのめあて」を立てさせる。聞き手には、話の中心に気を付けて聞くことを意識させる。ワークシートには、発表を聞いて「便利さ、不便さ」がわかったかどうかを判定させ、それぞれの発表にコメントを書かせる。	話② 話③ 言①
まとめ		〔手立て・発表会の振り返りをさせる。〕 次のような観点で書かせる。(①発表会を振り返って、②単元全体を振り返って、③次はどんなスピーチをしてみたいか) 最後のまとめを、次の「話すこと・聞くこと」の学習へのつなぎとする。	関①

VII 結果と考察

【検証 1】

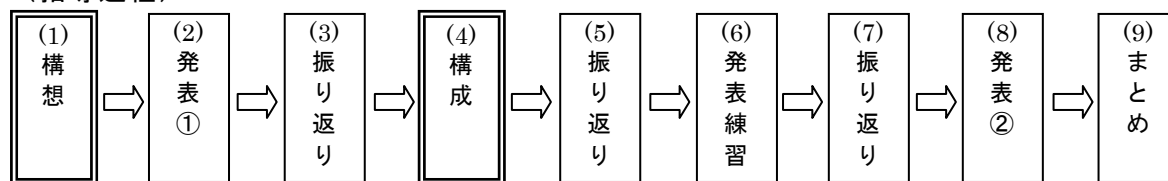
発表のための構想及び構成の場面で、書くことを取り入れることにより、思考が整理され、筋道を立てて話す能力を高めることができるであろう。

【結果】

話す能力を充実させるために、指導過程の(1)と(4)で書くことを取り入れた。

(1)の構想では、ウェビングにてイメージしたことを言葉に書かせ、(4)の構成ではスピーチ内容を原稿に書かせた。

(指導過程)

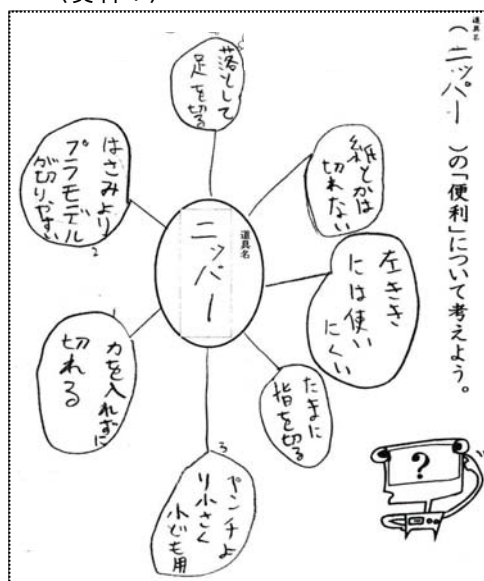


〈資料 1〉

(1)の構想では、ウェビングの手法を用いて様々な角度から自分で選んだ道具について、思いついたことを書き留めさせた(資料1)。その結果、児童全員が自分の準備した道具の便利さ不便さについて発表することができた。

(4)の構成では、(3)の過程で話の組み立て方について視点を持たせた上で、スピーチ原稿を書かせた。

表1は、スピーチ原稿において「スピーチしたい内容を筋道を立てて表現できているか」について4つの観点から評価したものである。その結果、「十分満足」または「満足」の児童が、87%であった。



【考察】

構想の場面では、テーマにふさわしい内容をイメージさせることがねらいである。そのためにウェビングの手法を用い、イメージしたことを自由に書かせた(資料1)。

その際、「どこが便利か」、「どういうときに便利か」、

また「誰にとって便利か」、「誰にとって不便か」と思考を導くためのキーワードを示し、様々な角度から道具を捉えさせた。その結果、児童はそれぞれが持ってきた道具の便利さ・不便さについて両面から書き留めることができた。発表の前に話材を確認させることで、

表1 スピーチしたい内容を筋道を立てて表現できているか
(児童36名 スピーチ原稿)

十分満足	満足	やや努力を要する	努力を要する
31%	56%	13%	0%

評価の際の観点

ア.テーマに合った内容か、イ.話のまとまりや筋は良いか、
ウ.意見と根拠があるか、エ.つなぎ言葉や文末表現は適当か

児童全員が発表できた。児童の中には、発表前に書き出しの文章をワークシートの隅に書いていたり、話す順序に番号をふり、組み立てをした上でウェビングを活用し思考の整理、構成に活用している児童もいた。ウェビングで導かれた言葉のメモは、思考を整理し話材を確認する手段として有効であり、それを手立てに第一回目の発表(発表①)につながることができた。

しかし、授業後の児童の感想には「内容がわかりやすくできなかった」「発表するのは思った以上に難しかった」との感想が多かった。また、録音された児童の発表を確認してみると、発表の大方は、言いたいことは伝わるが話の組み立てがバラバラであったり、根拠がはっきりしなかったりと場面が伝わりにくい。このようなことを経験させた上で、構成の必要性に目を向けさせた。

(4)の構成の場面では、(3)で培った構成の視点をもとに「はじめ・なか1・なか2・おわり」の話の組み立て方を示し、スピーチ原稿を書かせた。文を書かせる際には、(1)の構想で使用したウェビングのメモを活用し、よりわかりやすく伝えるための話材の選択をさせた。また、スピーチメモはそれぞれのまとまり毎のおおよその文字数がわかるように工夫し、「なか」の部分を詳しく書けるようにした。指導の際には、具体的な根拠を書く、つなぎ言葉を使う等、書くための視点を示しながら書かせた。その結果、87%の児童が、わかりやすく伝えることを意識し、話したいことを筋道を立てて表現することができた(表1、十分満足56%・満足31%)。児童は、書いて考えることを通して、思考を整理し、より詳しく場面の状況を捉えることができたと考えられる。

【検証2】

学びの過程で、発表の様子を振り返ることのできる場面を設定することにより、話すこと・聞くことについて改善の視点が明確になり、課題に気づき意識を持って学習に取り組むことができるであろう。

【結果】

本番の発表会では、「自分のスピーチが良くなった」という実感をともなう感想が多かった。「なぜ良くなったと思うか」の問いに対する児童の回答を、抜粋し次のように整理した。

ア. Bさんのスピーチで勉強して、そこからどんどん分かってきたから	発表の振り返り (録音を聞かせる)
イ. Bさんの話を聞いて、私も同じ所がたくさんあったし、それを直せたから	
ウ. Bさんの発表を聞いて、とても勉強になって自分も直したから	
エ. アドバイスをもらって、ここは書かない方がいいよと教えてもらって、自分でも見直してわかりやすく直せたから	スピーチ原稿の 振り返り
オ. 内容をよく考えて、文を整理して書いたので良くなったと思う	
カ. グループの人が聞いてくれて、アドバイスをくれたから	発表練習の 振り返り
キ. 練習して原稿が頭に入ったからスラスラ言えた	
ク. 物をもっと上に上げた方がいいとかアドバイスをもらい練習したから	
ケ. 話す回数が増えたからそんなに緊張しないでできるようになった	
コ. 最初は何を言っていかなかったらなくて、頭の中で整理できなかったけど、原稿に書いたらわかりやすくなった	

スピーチが良くなった理由として、約7割の児童が振り返りの場면을挙げている。

【考察】

(1) 発表の振り返り（録音を聞かせる）

発表①の段階で、「言いたい事は伝わりますが、文の組み立てはバラバラ」「根拠がないため場面が伝わりにくい」という課題があった。

そのため、発表①の音源を皆で視聴し、「内容がわかりやすいか」という視点で感想を述べ合った。



客観的に振り返ることを通して、話し手は伝えているつもりでも聞き手には伝わらない場合もあるということや、どう改善すればいいかについて確認できた。

以下は、C男の振り返り後の変容である。

C男 発表①

ぼくは、ホチキスについて発表します。ホチキスは間違えてやったときに後ろの金具でもとれるから便利。どういうときに便利かと言うと、サラリーマンや芸能人やマネージャーです。不便な人は力の弱い人です。

これで発表をおわります。



C男 発表②

ぼくは、ホチキスの便利と不便についてしょうかいします。ホチキスの便利な所は、後ろの金具で間違えてとめた所をはずせることです。どういう人が便利かと言うと、書物を持つ人、サラリーマンや芸能人やマネージャーなどです。紙がバラバラになったとき、まとめられるからです。

でも、目が見えない人や力が弱い人には不便です。また、もう一つ不便な所は、しんをいちいちかえるからです。後もう一つ、金具でケガをする可能性があるからです。

ぼくは、ホチキスが不便な所もあるので、新商品を開発してほしいです。

文中の下線部について、発表①では根拠がなく内容がよく伝わらなかったが、発表②では相手意識が生まれ、より詳しくわかりやすくなっている。授業後の感想で、多くの児童は「他の人へのアドバイスだったけど、ぼくにもアドバイスになりました」のように、録音を聞いて振り返ることにより、聞いた発表を自分のものと捉え文章構成に生かすことができたようである。

また、振り返りの活動で、録音の再生を集中して何度も聞くことで、聞きとりのポイントを学ばせるにも有効であった。

(2) スピーチ原稿の振り返り

スピーチ原稿の振り返りでは、見直しの視点を与え、自分で一度読み直し手を入れさせた。その後、隣の人にわかりやすいかどうか聞かせてみたり、実際に原稿をチェックさせたりという活動を行った。

児童は、書いた原稿をもう一度振り返ることで自分の言いたい事が整理され、伝わりやすい

文のつながりや文末に直すことができた。自分で読み直したり、友達からの指摘を受けることで、より説得力のある根拠へと内容自体を直す児童も出てきた。授業後の感想には、「昨日書いた原稿をもう一度読んでみると、わかりにくかったのでびっくりしました」とあり、振り返ることでスピーチ原稿をよりわかりやすい内容へと高めることができたと考えられる。



しかし、振り返りの作業が児童間であるため、言葉の使い方の未熟さや分析力の未熟さが残ることが課題である。この不十分さを補うには、最終段階で教師の手による指導が必要になる。

(3) 発表練習の振り返り

「相手にわかりやすく伝える」という視点で、まず個人練習を行わせ、その後、グループでの発表練習に移り、気づいたことを互いにアドバイスさせた。発表している当人は、なかなか自分自身を振り返る余裕がないので、まわりから気がついた事を客観的に言ってもらうことで、発表を振り返ることができた。

実際に、「もう少し目線を上げて」や「声を大きく」の他に具体物の提示の仕方等についてアドバイスが出された。また、「みんな、いいことを言ってくれたから発表会が楽しみ。(D子)」のように認めてもらったことが話すことへの自信につながった児童もいる。



(4) 授業後の視点の変容について

一連のスピーチ指導を行ったことで、「話すとき、聞くときに大切なこと」についての意識に変容がみられた。「話すとき・聞くときに大切なこと」として、学習前には態度面のみの記述が多かったが、学習後には内容面にも目が向くようになった(表2・表3)。

「話すときに大切なことは何ですか」に対する答えとして、内容面に目を向けることのできた記述は14%から66%に増えている(表2)。

表2 話すときに大切なこと(児童の意識調査)

	話すときに大切なことは何ですか(事前)		話すときに大切なことは何ですか(事後)
態度面	・大きな声で話す ・相手の目を見て話す ・姿勢をきちんとする ・はずかしがらない、笑わない	態度面	・声の大きさや話す速さに気を付ける ・相手に目線を向ける
内容面	・みんなに伝わるように話す ・相手がわかりやすい内容を考える	内容面	・内容に気を付ける ・内容が伝わるようにはっきり話す ・キーワードをわかりやすく説明する ・声も大事だけど話す内容も大事
	14%		66%

表3 聞くときに大切なこと（児童の意識調査）

	聞くときに大切なことは何ですか（事前）		聞くときに大切なことは何ですか（事後）
態度面	・ 静かに聞く ・ 姿勢を正して聞く ・ おしゃべりしない ・ 目を合わせていい姿勢で聞く ・ うなずきながら聞く	態度面	・ 目を見て静かに聞く ・ 話し手を見て最後まで聞く ・ うなずきながら顔を見て聞く
		内容面	・ キーワードを見つけて聞く ・ 相手の伝えたいことを見つけながら聞く ・ 想像しながら聞いたりする ・ 分からない事や聞こえない事はもう一度たずねる
内容面	・ 話している内容について聞く		

また、「聞くときに大切なことは何ですか」については、3%から47%に増えている（表3）。これは、話し手として、聞き手としての視点を明確に持たせることを繰り返すことで、児童が課題に気づき、意識を持って学習に取り組んできたからだと考えられる。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

- （1）「話すこと」の学習において、話材を考え原稿を書くことで、思考が整理され、筋道を立てて話すことができるようになった。
- （2）指導過程の中で計画的に振り返ることにより、課題が明確になり、視点を持って発表することができるようになった。
- （3）話し手の視点は聞き手の視点でもあり、話すことの学習を通して、聞き手としても視点を持って相手の話を聞くことができるようになった。

2 課題

- （1）書くこと自体が苦手な児童は、発想力の弱さから文章を詳しく書くことができなかったり、組み立てたりすることが難しい。それらの児童には、個別に場面想起を促したり、言葉かけをする等、教師の支援が必要である。
- （2）「話すこと・聞くこと」の能力の定着を図るには、他領域、他教科においても、言語に関する活動を充実させ、継続して育成する必要がある。

《主な参考文献》

- 『小学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省 東洋館出版社 2008 年
『音声言語指導大事典』高橋俊三監修 植西浩一、宗我部義則 他共著 明治図書 1999 年
『話す力・聞く力の基礎・基本』井上一郎 明治図書 2009 年
『言語技術教育としての国語科』市毛勝雄 明治図書 2000 年